

「多い」の装定用法と述定用法について*

田中 秀毅

[要約]

70年代半ばから装定用法の「多い」に制限が課されることが指摘されてきた。例えば、「大きいクジラ」と言えるのに「*多いクジラ」とは言えない。対照的に、述定用法の「多い」は「クジラが多い」のように容認される。このように装定用法の「多い」は制限を受けるものの、「(学生が) 多いクラス」のように、かっこの中の要素が推論によって補足され、容認される場合があることも指摘されている。本研究は、装定用法の「多い」が容認される統語的・意味的条件を解明することを目的とする。主な主張は、「多い」の装定用法では、量化される対象と比較される対象が必要で、後者の指示レベルが前者よりも上位でなければならない、というものである。また、「多い」の装定用法と述定用法の違いについても論じる。述定用法の「多い」は上記の制約を満たす必要がないが、「は・が」の選択が容認性に影響するため、装定用法の場合とは異なる観点から考慮する必要があると主張する。

- (5) 多いクラスでは、学生が 60 人いる。 (中川(2009: 62))
(6) 多い時は、一度に 10 ドルも儲けた。 (同)

(5)の「多いクラス」は学生が多いクラスを、(6)の「多い時」は儲けが多い時を適切に指している。

本研究は装定用法の「多い」が認可される条件を探ることを目的とする。構成は以下のとおりである。2 節では「多い」の装定用法に関する先行研究を概観する。3 節では、「多い」の装定用法と述定用法の共通性に注目した佐野(2016)の分析をまとめ、4 節では佐野分析の問題点を指摘する。5 節では代案を提示し、装定用法の「多い」の振る舞いに対して言語学的な説明を与える。6 節では「多い」の装定用法と述定用法の違いについて論じる。7 節では結論を述べる。

2. 先行研究 (1) : 装定用法の機能に注目した分析

装定用法の「多い」の機能に注目した研究として、仁田(1980)と寺村(1991)を取り上げる。仁田(1980: 243)は、(3)の「白髪の多い女の人」と容認されない「*多い女の人」では主要語の「女の人」の限定される側面が異なると主張する。すなわち、後者では、主要語が〈数〉的観点から限定されるのに対して、前者では、「白髪の多い」が「句的規定語」になり、〈数〉でなく、〈容姿のあり方〉を限定するという。容姿は主要語「女の人」の内在的な性質・属性の1つであるが、数はそうでないことから、単独で生じる「多い」の装定用法が容認されないのだと仁田は分析する。

寺村(1991: 264)は、装定用法の機能を「同種のものなかで、範囲を限定してその特徴をいう」ことであると捉えている (Bolinger (1967)のいう characteristic)。寺村によると、「多い・少ない」は「ある時、ある所に存在する物の数量について評価することば」であり、「大きい・古い」のような「存在するものの (他と比べての) 形状や状態や性質を述べることば」とは異なる。「多い」が単独で連体修飾できないのは、数量の指定だけでは被修飾名詞の特徴を十分に表さないことによる。逆に「多い・少ない」が「いちばん」のような限定語を伴った場合に文が自然になることについては、被修飾名詞の特徴を表すようになるため装定用法の機能を満たすと考えている。

仁田と寺村の見解は、単独で生じる「多い」が被修飾語の数量を限定するだけで、その性質や属性を表していないと捉える点で共通している。佐野(2016)は、外在的な数量の程度を表す「多い」の装定用法が認められないとしても、内在的特徴を表す文脈であれば容認されてもよいはずだと主張する。しかし、次の例が容認されないことから、「多い」がクジラの外在的な数だけでなく、個体数が多いというクジラの属性 (内在的な特徴) も表

せないことになる。

(7) *多いクジラはミンククジラだ。 (佐野(2016: 83))

一方、次のように「多い」がガ格項を伴うと容認性が逆転する。

(8) 数が多いクジラはミンククジラだ。 (同)

(7)と(8)の最小対立は、「多い」が内在的な性質を表す上でガ格項が必須であることを示している。ただし、(5)(6)に示したように、ガ格項を伴わなくても「多い」が容認されることがある。各例が「(学生が) 多いクラス」、「(儲けが) 多い時は」のようにガ格項が省略されていると捉えられることから、佐野(2016)は(8)でガ格項が省略できない理由が説明されなければならないと主張する。

3. 先行研究(2)：装定用法と述定用法の統一的分析

佐野(2016)は、「多い」の装定用法と述定用法に基本的に同じ制限が課されると捉える。以下では、まず 3.1 節で述定用法の「多い」の特徴をまとめ、3.2 節で装定用法も含めた「多い」に課される制限をみる。

3.1 述定用法の「多い」

佐野(2016)は、述定用法の「多い」にも装定用法の「多い」のような使用制限がみられると指摘している。

(9) ノウサギ1匹でも捕れば十分だ。この動物はたくさんいる (*多い)。

(10) 人間なんかたくさんいる (*多い) んだ。1人くらい嫌なやつぐらいいいさ。

(佐野(2016: 83))

各例の主題「この動物・人間」は総称名詞(句)であるが、「たくさん」と対照的に「多い」はその性質を述べることができない。ところが、次のようにヨリ句やガ格項を伴うと、「多い」は総称名詞と整合する。

(11) クジラはイルカより多い。 (佐野(2016: 83))

(12) クジラは個体数が多い。 (同)

この特徴は、(7)(8)の対立が示す装定用法の「多い」の振る舞いと共通する。よって、佐野は、装定用法の「多い」の制限が述定用法にも課されていると主張する。

以下では、述定用法の「多い」の解釈についてまとめる。佐野は、服部(2002)の見解に基づいて「多い」が「相対的解釈」または「絶対的解釈」を受けると考える。

「多い」や「少ない」は、文脈から想定される何らかの上位集合に相対的な多さ(少なさ)を表す場合(「(留学生の中では)中国人学生が多い」など)と特に上位集合を考えないいわば絶対的な多さ(少なさ)を表す場合(「ごみが多い」など)とがある(必ずしも両者が区別できるわけではない)。(服部(2002: 72))

「(留学生の中では)中国人学生が多い」では、中国人学生の上位集合(留学生の集合)が想定される。よって、中国人学生とそれ以外の留学生(例えば、米国人学生やカナダ人学生など)との人数が対比され、中国人学生の人数がほかの国の留学生よりも多いという解釈になる。これに対して、「ごみが多い」ではごみの上位集合が想定されず、公園のごみがほかの構成物(ベンチや噴水など)と数量的に対比されることはない。よって、単にごみの量が多いことを述べていることになる。²

佐野は、「多い」の解釈が1つに定まらないことがあると指摘している。例えば、次の例は絶対的解釈だけでなく、相対的解釈も可能であるという。

(13) ○○公園はケヤキが多い。(佐野(2016: 85))

この文は公園のほかの植物と対比する文脈で用いられると相対的解釈になる。相対的解釈では、ケヤキの上位集合として植物の集合が想定され、マツやカエデなどのメンバーとの対比が考えられる。

以下では、「多い」の絶対的解釈と相対的解釈がどのような環境で得られるのかをまとめる。佐野は「多い」の相対的解釈が可能となる場合として次の3つをあげている。

- A 他との比較であることを明示する要素(「(~の中で) いちばん・~より」など)が含まれる場合
- B ガ格項がほかの同タイプの集合や対を想定できる名詞である場合
- C 場所・時を表す二格(またはデ格)が含まれる場合

各場合の例は次のとおりである(波線は相対的解釈を可能にしている表現)。

- (14) この地域の空の旅行者は他のどの地域より多い。(佐野(2016: 85))
 (15) 牛肉については、東京の3市場で「上」以上が多く、大阪の3市場では「中」および「並」が多い。(同: 86)
 (16) 魚介類に限らず、生物は沿岸域(海岸の近く)に多い。(同: 87)

(14)ではヨリ句が明示され、地域ごとの空の旅行者が比較されている。(15)は牛肉の等級(上・中・並)についてのもので、東京市場と大阪市場における各等級の比率が比べられている。(16)では場所のニ格句が明示され、生物の存在場所について沿岸(とそれ以外の場所)が比較されている。

次に「多い」が絶対的解釈になる環境をみる。「多い」が絶対的解釈になるのは、比較される他者がなく、単に数・量に関する程度が高いことを表す場合である。佐野は例として「一が多い」の形式をあげている。

- (17) {車/人/虫/クジラ/問題/ごみ/雨}が多い。(佐野(2016: 88))

佐野(2016: 88 注9)は、「一が多い」が絶対的解釈を受けるときは、「この辺りには・今日は」などの「状況語」が想定されると述べている。ただし、状況語が明示される場合、久島(2010)が指摘しているように、それは主題化されなければ不自然になる。

- (18) ○○公園 {は/?に} ゴミが多い。(佐野(2016: 88))
 (19) 既存の化学処理法 {は/?に} 問題が多い。(同)

この事実に基づき、佐野は場所項が主格としての性質を帯びる一方で、ガ格項は主格としての独立性が低く、「多い」と合わさって形容詞のように機能する、と述べている。佐野の表現を借りれば、「一が多い」はガ格項の外在的な数を表しながら、それ全体で1つの形容詞のように機能し、主題の説明を行っている」のだという。

3.2 「多い」の使用条件

佐野(2016)は、「多い」の装定用法・述定用法の使用条件が基本的に以下のいずれかの場合になる、と主張する。

- (20) 「多い」の使用条件

[1] 他と比較して相対的に数・量的な程度が高いことを述べる場合 [=相対的解

積]

- [2] 「一が多い」の形でガ格項の外在的な数量を表す場合[=絶対的解釈]。ただし、述定用法において「一は一が多い」の形をとる場合、あるいは装定用法において「一が多い+名詞」の形をとる場合には、更に「一が多い」で「1つの意味的なかたまりをなす」形容詞句として、主題あるいは被修飾名詞句の性質を表す。

(佐野(2016: 89-90))

この条件によると、「多い」が容認されるのは、数量の程度を比較できる他者が認められる場合(条件[1])、または「一が多い」の形式でガ格項の外在的な数量を表す場合(条件[2])、のいずれかということになる。

佐野は次の「多い」と「大きい」の対照性に注目する。

(21) *多いクジラ vs. ??クジラは多い。 (佐野(2016: 90))

(22) 大きいクジラ vs. クジラは大きい。 (同)

佐野は「多い」と「大きい」が対照的に振る舞う理由を次のように説明している。

「大きいクジラ」「クジラは大きい」は種の属性を表す場合にも、その構成要素である個々の「クジラ」も「大きい」という性質を持つことが前提となっている。一方、個々の「クジラ」が「多い」という性質を持つと考えることは意味的に不可能である。このため、その集合体である「クジラ」という種の属性を表すこともできず、非文となると考えられる。(佐野(2016: 90))

この引用は、「個の性質を表さない述語は種の属性も表さない」という前提に基づき、「多い」が個の性質を表さないことから、装定用法も述定用法も容認されない、と結論づけている。

また、「*多いクジラ」と「クジラが多い」の対立については、佐野は装定用法の「多い」と被修飾名詞の「クジラ」がガ格の関係にあるものの、「一ガ格」が明示されないため、相対的解釈も絶対的解釈も認められないと述べている。要するに、「多い」の装定用法ではガ格項が明示されない限り容認されない、ということである。一方で、(5)(6)のように「多い」がガ格項を伴わなくても容認される例には異なる説明を与える。まず、「多い」が「クラス・時」とガ格の関係にないと指摘する(クラスや時の数量が多いのではない)。さらに、文脈上、「(人数が)多い・(儲けが)多い」のように「多い」にガ格項を補うことができ、

これが1まとまりの形容詞句として捉えられ、絶対的解釈が可能になるとする。

4. 佐野(2016)の問題点

佐野分析には少なくとも3つの問題点があると思われる。1点目は、個別の個体の性質を述べる述語と、種の性質を述べる述語との関連性についての問題である。前節でみたように、「多い」は個別の個体の性質を述べる表現でないから種の性質を述べることができない、と佐野は主張する。この主張は(21)の絶対的解釈(個体数が多いというクジラの属性に関する解釈)が認められないことから導いたものと推察されるが、議論の余地がある。というのも、個別の個体と整合しない述語でも種と整合するものがあるからである。(23a)は Carlson (1977)が指摘した例であるが、主語の the dodo (「ドーデー」: 17世紀に絶滅した飛べない大型鳥の総称)が総称解釈を受け、extinct (「絶滅した」)によって叙述されている。(23b)は日本語の対応文である。

(23) a. The dodo was extinct. (Carlson (1977))

b. ドーデーは絶滅した。

「絶滅した」は種について述べる述語で、次の文法対立がみられる。

(24) *その時に捕獲されたドーデーは絶滅した。

(25) その時に捕獲されたドーデーは死んでしまった。

主題の「ドーデー」は、単一の事態を表す連体修飾節を伴うため個体解釈を受ける。よって、(24)のように種を叙述する述語とは整合しない。一方、(25)が示すように「死んでしまった」のような個体について述べる述語と整合する。

ところが、(23b)の述語の装定化は次のように容認される。

(26) 絶滅したドーデー cf. 死んでしまったドーデー

佐野(2016)によれば、個別の個体に適用できない述語は総称名詞を連体修飾できないはずだが、それは事実と反している。つまり、(23b)と(26)は「多い」の場合と対照的な文法性を示す。よって、「多い」が個別の個体に適用できないことを根拠にして、総称名詞を連体修飾できない事実を説明することはできない。

2点目はガ格項の補足に関する問題である。佐野は、(5)(6)でガ格項が補われ、「多い」

の絶対的解釈が可能になると分析している。クラスが複数あることや儲けた事態が複数回あることは明らかだと思われるが、佐野はここでの「多い」が絶対的解釈になると主張する。3.2 節でみた「多い」が相対的解釈になる環境 C には、場所のデ格や時のニ格が含まれている ((6)の「多い時は」は「多い時には」と同義とみなせる) のに、(5)(6)の「多い」が相対的解釈にならない理由が明らかでない。

さらに、「*多いクジラ」で「個体数が」を補足できないのはなぜか。「クジラ」と「多い」のガ格の関係がそれを阻むということなのか。「個体数が多いクジラ」が許容されるのだから、「クジラ」と「多い」の格関係をキャンセルしてガ格項の「個体数が」補足されてもよさそうに思われるが、その可能性については論じられていない。

3 点目の問題は、「多い」が「の」を連体修飾する場合に関するものである。佐野(2016: 90 注 13)は、次の実例に基づいて「多い」が「の」を連体修飾する場合は、単独で用いられても容認されると指摘している。

- (27) 日本で一番多い苗字は「鈴木さん」だそうですが、私は今まで生きてきて3人しかお会いしていません。多いのは、「佐々木」「佐藤」です。

(佐野(2016: 90))

佐野はこの事実について、「被修飾名詞の個々の性質について「多い」と述べる可能性が排除されるため、「多い」単独での使用が可能になるものと思われる」と述べている。「の」が「苗字」の代用表現であることは明白であるが、「の」になると個性が失われる理由が明確でない。(27)でも苗字から筆者が出会ったものの中で多いもの(すなわち「佐々木・佐藤」)を選び出していると解釈できるが、その場合に苗字の個々の性質を述べていないというのは、どういうことなのか。

以上、佐野分析の問題点を指摘した。「多い」が単独で連体修飾する場合に容認されないことや、ガ格が推論によって補足されたり、「の」を連体修飾したりした場合に容認されることについての記述はなされているが、それらに対して一貫した説明を与えるまでには至っていない、と結論づけられる。

5. 代案

本節では、装丁用法の「多い」の振る舞いを適切に説明するための代案を提示する。相対形容詞である「多い」が認可されるには、①量化される対象と②比較される対象が不可欠である。①は数量詞としての「多い」の性質に由来するもので、②は比較表現としての「多い」の性質に由来するものである。なお、あとで述べる理由により①と②の指示対象

は同一ではなく、②の方が①よりも上位の意味概念でなければならない。以下では、例に基づいて「多い」の認可条件を検証していく。

5.1 「多い」の量化対象と比較対象

はじめに、(3) ((29)として再掲)についてみよう。

(29) 白髪の多い女の人が歩いて来た。 (= (3))

ここでは、「多い」によって量化される対象は「白髪」であるが、比較される対象は「女の人」になる。つまり、指示対象が女性の集合から白髪の多い個体に絞り込まれている。比較対象と量化対象は全体と身体部分の関係 (= 譲渡不可能な所有関係) を結んでいるため、比較対象が量化対象よりも上位の意味概念になっている。

次に、(5)(6) ((30)(31)として再掲) をみよう。

(30) 多いクラスでは学生が 60 人いる。 (= (5))

(31) 多い時は、一度に 10 ドルも儲けた。 (= (6))

(30)では、「多い」によって量化されるのは「学生」であり、比較される対象は「クラス」である。よって、「多い」の量化対象と比較対象が存在し、かつそれらの指示対象は同一ではない(学生はクラスの構成員であって、クラスではない)。このように、「多い」は「クラス」を連体修飾しているが、量化するのは「学生」である。「多い」が「クラス」よりも下位レベルの集合を量化している点が重要である。(30)の解釈は、複数のクラスの中で学生数が 60 人のものがあり、ほかのクラスよりも多い、となる。

(31)では、「多い」の量化対象は儲けた額、比較対象は儲けた事態(発生時によってメトニミー的に事態が指されている)である。よって、「多い」の量化対象と比較対象が存在し、かつ両者の指示対象は異なっている。儲け額(量化対象)は事態の構成物であり、事態の下位概念なので、比較対象と量化対象の指示レベルの関係は適切である。(31)の解釈は、複数回あった儲けの事態のうちで、10 ドル儲けたときがあり、それがほかのときに比べて多かった、となる。

本研究は、(30)(31)のいずれの場合も「多い」の量化対象と比較対象があり、それぞれの指示対象が適切に異なっていると分析する。比較対象があるということは、佐野が与えた絶対的解釈とは相容れない。

5.2 量化対象と比較対象の指示的な上下関係

装丁用法の「多い」の比較対象と量化対象の指示レベルの関係について考察する。この特徴は「多い」に固有の特性というよりも、もっと一般的な、連体修飾節に含まれる数量詞の特性に由来する。そのことを次の例で確認してみよう。

(32) [国道で2台すれ違った] 乗用車

この句では、[] で示した連体修飾節（関係節）によって「乗用車」が修飾されている。「乗用車」は節内の「2台」と意味的な関係を結ぶが、指示レベルが異なることに注意すべきである。すなわち、「2台」は乗用車のトークンを指し、「乗用車」はタイプを指す。このことは、組み合わされる述語の特性によって確かめられる。

(33) *国道で2台すれ違った乗用車がパンクした。 (田中(2015: 100))

(34) 国道で2台すれ違った乗用車が生産中止になった。 (同)

(33)に含まれる「パンクした」はトークンを叙述する述語 (Carlson (1977)のいう「場面述語」(stage-level predicate)) なので、タイプ解釈を受ける主語の「乗用車」と整合しない。³ 一方、(34)に含まれる「生産中止になった」はタイプを叙述する述語 (Carlson (1977)のいう「個体述語」(individual-level predicate)) なので、タイプ解釈を受ける主語の「乗用車」と整合する。このように、連体修飾節に数量詞が含まれると、その量化対象は被修飾名詞(句)の指示対象よりも下位の意味概念にならなければならない(この構文の統語的・意味的特徴については、Kaga (1991)および田中(2015)を参照のこと)。

「多い」は数量詞であるため、その装丁用法において(32)と並行的に、「多い」が被修飾名詞(句)の指示対象よりも下位レベルの個体を量化すると考えられる。以上、「多い」の量化対象と比較対象の指示レベルのずれについて考察した。

5.3 「多い」が容認される例

装定用法の「多い」が容認される例を分析していく。まず、「多い方」について考えてみよう。

(35) (3つの中で) 多い方を取ってください。⁴ (仁田(1980: 247))

仁田(1980)はこの例の「多い」が容認される理由について説明を保留しているが、佐野

(2016)は次のように説明する。

「多い方」は数量の異なるものが複数存在することが前提となっており、その中で「より数量の多いもの」を表す。このため(60) (= (35)) では相対的解釈が成立し、「多い」単独でも使用されるといえる。(佐野(2016: 92))

この説明によると、佐野は(30)(31)の場合のようにガ格項を補足しない。実際、佐野は(30)(31)の「多い」が絶対的解釈になるのに対して、(35)の「多い」は相対的解釈になると主張している。おそらく、3.2 節でみた「多い」の使用条件[1]で相対的解釈の場合に「一が多い」の形式を想定しないため、(35)でガ格項を補足しないものと考えられる。とは言え、「多い」と「方」はガ格の関係になると思われる(「こちらの方が多い」)。そうであるならば、佐野分析では(35)が「*多いクジラ」の場合と同じように排除されてしまう。

我々の分析では、「多い」の量化対象は(「方」が代用表現として用いられている)集合のメンバー、比較対象はほかの集合となる。集合とメンバーでは集合の方が上位概念なので、比較対象の指示レベルが量化対象よりも上になる。

(27) ((36)として再掲)の「多いの」も「多い方」と並行的に扱うことができる。

(36) 日本で一番多い苗字は「鈴木さん」だそうですが、私は今まで生きてきて3人しかお会いしていません。多いのは、「佐々木」「佐藤」です。(= (27))

この例では、「多い」の量化対象は私が会った人の苗字の数(トークン)で、比較対象は代用表現の「の」が表す苗字(タイプ)となる。つまり、(36)の第2文は、私が会った人の苗字の中で(件)数が多いものは「佐々木・佐藤」です、という解釈になる。佐野の見解と異なり、(36)は特別な扱いを必要としない。

次に(4) ((37)として再掲)の「いちばん多い」について考えてみよう。

(37) いちばん多い誤りは冠詞の使い分けです。(= (4))

「多い」の量化対象は誤りの件数(トークン)で、比較対象は誤りの種類(タイプ)となる。文の解釈は、複数ある誤り(の種類)の中で、件数をもっとも多いものが冠詞の使い分けである、となる。仁田や寺村は装丁用法の機能(特徴づけ)の観点から数量詞だけでは不十分だと主張したが、我々の分析では「多い」の量化対象と比較対象を区別するために、「いちばん」のような表現が必要になっていると考える。すなわち、「多い」の被修飾

名詞である「誤り」がタイプ解釈を受けるためには、「多い」が「誤り」のトークンを量化する必要があるが、それは「いちばん」によって誤りの事例（トークン）をメンバーとする誤りの集合（タイプ）が想定されることで達成される。

(30)の「多いクラス」で構成員の学生が推論されたように、(37)でも誤り（トークン）が推論されないのかという疑問が生じるかもしれない。しかし、「クラス」の場合と異なり、(37)では同一表現の「誤り」のタイプ解釈とトークン解釈が必要になる。これは、「多いクラス」のように「クラス」と「学生」がタイプ解釈とトークン解釈を分担するのに比べて、解釈の負荷が大きいため、「いちばん」が必要になるものと思われる。

以下の例も「多い」の被修飾名詞がタイプ解釈を受ける場合である。

(38) この地方の有権者に多い傾向 (仁田(1980: 243))

(39) 都会人に多い考え方 (同)

(40) この辺りではどんな事故が多いですか。——そうですね。この辺りで多い事故は車と自転車の接触事故です。 (寺村(1991: 264))

(38)は二格句「この地方の有権者に」によって「多い」の量化対象がトークンとしての「傾向」となり、被修飾名詞の「傾向」はタイプ解釈を受ける。つまり、この地方の有権者の傾向（トークン）のうちで多いもの（タイプ）、という解釈になる。(39)でもやはり二格句が「多い」の量化対象と比較対象の区別を可能にする。すなわち、都会人がもつ考え方（トークン）のうちで、多いもの（タイプ）、という解釈になる。(40)ではデ格句の「この辺りで」が「多い」の量化対象と比較対象の区別する。(ほかの地域に比べて)この辺りで発生件数（トークン）の多い事故（タイプ）が車と自転車の接触事故という解釈である。

5.4 「多い」が容認されない例

ここからは容認されない「多い」の例について検討していく。まず、(7) ((41)として再掲)についてみよう。

(41) *多いクジラはミンククジラだ。 (= (7))

この文では「多い」の量化対象と比較対象がともに「クジラ」になってしまう。結果として、それぞれの対象の指示対象が同一となり、容認されない。なお、「数が多い」のようにガ格項を伴うと、「多い」の量化対象はクジラの個体数（トークン）、比較対象はクジラの種類（タイプ）になる。各指示対象の指示的な上下関係も適切である。

次に、(2b) ((42)として再掲) を考えてみよう。

(42) *多い人が庭に集まっている。 (= (2b))

この文では「多い」の量化対象と比較対象がともに「人」になってしまう。被修飾名詞がヒト名詞（「人」など）の場合、モノ名詞（「乗用車」など）と対照的にタイプ読みがしづらいことも、解釈の可能性を低くする要因になっていると考えられる。

(43) *[ヒアリが2人刺した] 子ども cf. [ヒアリが刺した] 2人の子ども

この句では、連体修飾節に含まれる数詞の「2人」と被修飾名詞の「子ども」が意味的に関係するが、「2人」を子どものトークン、「子ども」をタイプとして解釈できない（(32)の「乗用車」とは対照的であることに注意）。人間は物と違って個別性が重視されるため、被修飾名詞のタイプ解釈が難しい（Kaga (1991)を参照）。

ヒト名詞のタイプ解釈に関連して、木下(2004)の分析を取り上げたい。木下は形容詞の装定用法について、寺村(1991)の見解を踏襲する。すなわち、「被修飾語である名詞の、他の同種のものとは比べての特徴を述べるのに（つまり範囲限定の品定めに）使われる」という特性である。「??（この辺りで）多い事故」を例にとると、木下の説明は以下のようになる（??がつけたかっこは、くくられた要素を省いたときの容認性を示している）。「この辺り」が「事故」の範囲限定をすることで、事故の量について述べることができる。例えば、車と自転車の接触事故や子どもの飛び出し事故などからどれが多いか判断するのに、範囲限定がないと難しい。木下は、「範囲限定」を次の、より一般的な条件に昇華させる。

(44) 「多い」の装定用法成立の条件

量の多少を判断する際の比較対象が明示化されている。（木下(2004: 30)）

この条件は、上で述べた事故の例のような場所格による範囲限定だけでなく、次のような比較対象そのものを明示することによっても達成されるという。

(45) 灯りのない街に昼間より多い人が出ている。（木下(2004: 30)）

木下は、この文で昼間の人と夜の人が比べられていると指摘する。ただし、ここでいう「人」は個別の人ではなく、人の集合とみなしている。つまり、木下は、「多い」の被修飾名詞

が類として解釈されると捉えている。

木下(2004)の被修飾名詞についての見立ては、おおむね我々の分析でのそれと重なる。(45)の主格の部分は、「昼間(の人の集合)よりもメンバーが多い人の集合」となる。すなわち、「多い」の量化対象は(夜間の)人の集合のメンバーであり、比較対象は(昼間の)人の集合となる。ただし、筆者の言語直感では(45)はすわりがよくない。出典情報によると、インターネットのウェブサイトで収集したもののようだが、文語では次のように名詞の「多く」を用いるべきだと思われる。

(46) 灯りのない街に昼間より多くの人が出ている。

木下は、ほかにも「多い人」が含まれる実例をあげているが、いずれもインターネットのウェブサイトからのものである。

(47) そのときはもうすでにいつもより多い人たちが電車に乗っていました。

(48) 約5万人の観客で埋め尽くされたすり鉢状のスタンドと大歓声。当時の一関市の人口が5000人くらい。それより多い人が1カ所にいるんだから。

(49) 車が次々入ってきて、思っていたより多い人だった。といってもまだまだスペースはあったけどね。

((47)(48)は木下(2004: 29)、(49)は同:30)

木下は、これらの例で「人」が個体ではなく、集合として解釈され、別の集合と大きさが比較されていると捉えている。また、集合にとっての量を「属性」とみなすことによって、寺村のいう装定用法の特性(他の同種のものとは比べて特徴を述べること)を満たすものと考えている。さらに、木下は(42)の被修飾名詞を次のように「人々・人たち」に置き換えても容認されないことを指摘している。

(42') *多い人々が庭に集まっている。 (木下(2004: 31))

(42'') *多い人たちが庭に集まっている。 (同)

この事実を踏まえて、「多い」の装定用法が容認されるのは、被修飾名詞の属性よりも「比較対象の明確化」であると結論づけている。

我々の分析では、被修飾名詞がヒト名詞の場合、「多い」の量化対象になりやすいため、本来の解釈(「多い」の比較対象になり、そのメンバーが量化対象になる解釈)がブロック

されると考える。被修飾名詞が「クラス」のようなモノ名詞であれば、タイプ解釈ができるため比較対象が明示されていなくても容認されるということになる。

以上から、「人・人々」の違いで集合の解釈のしやすさが変わるという木下の見解には議論の余地がある。実際、(45)(48)(49)ではヨリ句が明示されているものの、被修飾名詞は「人」である。これらの文が容認されるのであれば、「人」は明示的な複数形でなくても人の集合として捉えられているものと考えられる。

次に、「多い」の被修飾名詞がモノ名詞の場合をみよう。

(50) *この辺には多い映画館がありますね。 (寺村(1991: 264))

この文では、二格項の「この辺に (は)」が「多い」の量化対象になることができない。というも、当該の句は主題となっているため、次の統語構造が示すように、「多い」の構成素ではないからである (NP は名詞句、AP は形容詞句の意味)。

(50') *この辺には [NP [AP 多い] 映画館] がありますね。⁵

二格句にハがつかない場合は、次のように容認可能な文を作ることができる。

(51) [NP [AP この辺に多い] 映画館] は名画座です。

この文では「多い」の量化対象が映画館 (トークン) で、比較対象は映画館 (タイプ) となる (「名画座です」は主題のタイプについて述べていることに注意)。つまり、(51)の解釈は (ほかの地域よりも) この辺に多くみられる映画館の種類が名画座である、となる。⁶

(50)の場所句から格助詞のハを削除すると次の文が得られる。

(52) [NP [AP この辺に多い] 映画館] がありますね。

この文は「あります」に対応する場所句が省かれた存在文である。ただし、「この辺には映画館が多くありますね」とは区別しなければならない。(52)に場所句を補ってみると次のようになる。

(53) [NP [AP この辺に多い] 映画館] がそこにありますね。

ここでは2つのニ格項が異なる働きをしている。「この辺に」は「多い」が量化対象をもつために必要で、「そこに」は存在を表す「あります」と組み合わせることで存在場所を明示するのに必要である。⁷

本節では代案を提示し、佐野(2016)の分析と比較しながら検証した。我々の分析では、「多い」の量化対象と比較対象が区別されなければならない。この制約は数量表現を含む連体修飾節の一般的な特性に由来するものであることを示した。

6. 「多い」の装定用法と述定用法の比較

本節では「多い」の装定用法と述定用法を比較する。佐野は、「多い」の使用条件が装定用法と述定用法で基本的に同じであるという立場をとり、次のように「多い」が単独では被修飾名詞や主題の性質を表せないと主張する。

- (54) a. *多いクジラ (佐野(2016: 90))
b. ??クジラは多い。 (同)

一方で、次のようにヨリ句・場所句・ガ格項が含まれると容認されることについては、「多い」の相対的解釈または絶対的解釈が可能であるからと主張する。

- (55) クジラはイルカより多い。
(56) クジラは {温暖な海／餌の多い沖合} に多い。
(57) クジラは {数／個体数／生息数} が多い。

佐野によると、(55)(56)は相対的解釈、(57)は絶対的解釈になる。また、次のようなガ格項だけの文では相対的解釈も絶対的解釈も可能であるという。

- (58) クジラが多い。

イルカなどの複数の候補からクジラが取り立てられていると捉えると「多い」の相対的解釈が得られ、クジラの外在的な数を表していると捉えれば「多い」の絶対的解釈が得られるという。要するに、文の形式ではヨリ句などの相対的解釈に結びつく表現が推論によって補足されることを認めている。ところが、(54a)ではそれを認めず、ガ格項がないから解釈できないとする。ここで重要なのは、文と句で捉え方が異なる根拠を示さなければ、単なる言語事実の記述でしかない、ということである。佐野は(54b)と(57)の違いを踏まえて、

「多い」と「数が多い」は共に数的程度の高さを表すという点で共通するものの、両者の使用条件は異なる」と述べているが、一方で(57)と(58)がほぼ同じ意味を表せることから、言語事実を包括的に説明しているとは言いがたい。

我々の分析では、装定用法の「多い」が認可されるには量化対象と比較対象が必要となる。述定用法における各対象の働きを確認してみよう。(56)では量化対象も比較対象も「クジラ」である。厳密に言えば、量化対象は温暖な海・餌の多い沖合にいるクジラ（の集合）で、比較対象はそれ以外の海域にいるクジラ（の集合）となるが、主題の「クジラ」はクジラ全般を指すので双方を包括的に指していると捉えるべきである。⁸ここでは、装定用法の場合のような、量化対象と比較対象の指示レベルのずれが起こらない。つまり、同じレベルで2つの集合が比較されている。(57)では、量化対象はクジラの数・個体数・生息数だが、比較対象はクジラ以外の生物が想定されるものの、明示されていないために漠然と数量の多さを述べているように感じられる。

(57)と(58)を比べてわかるのは、装定用法の場合と異なり、量化対象と比較対象の区別が明確でなかったり、比較対象が明確でなかったりすることである。このことが示唆するのは、装定用法の「多い」が絶対的解釈をもたないということだと考えられる。これは「*多いクジラ」は容認されないが、「個体数が多いクジラ」が容認されることから裏づけられる。

(59) 個体数が多いクジラは注目されない。

この文は主題の解釈が曖昧である。連体修飾節が「クジラ」を限定した場合にはクジラの下位分類が問題になり、(60a)の解釈が得られる。一方、連体修飾節がクジラを限定せず、単に個体数の情報を付加している場合には、(60b)の解釈が得られる。

- (60) a. 個体数が多いクジラは、個体数が少ないクジラほど注目されない。
- b. 個体数が多いクジラは、個体数が少ないトキほど注目されない。

ここで重要なのは、どちらの場合にも比較対象が存在することである。この点で、述定用法の「多い」とは対照的であると結論づけられる。述定用法の「多い」については、(54b)と(58)の文法対立など構文の違いも考慮してさらに掘り下げる必要がある。

7. おわりに

本稿では、「多い」の装定用法と述定用法について考察した。特に、「多い」が単独で連体修飾できる場合とできない場合の違いについて説明を試みた。従来の研究では、述定用法の機能に注目し、「多い」が単独で表す数量の大きさの程度は装定用法の機能を充足できないとしていた。一方で、「いちばん」や場所句を伴うと「多い」が連体修飾できることについては、「多い」が表す意味がどのように変わって装定用法の機能を充足できるのか明確に説明できなかった。

佐野(2016)は述定用法も視野に入れ、「多い」が装定用法と述定用法で基本的に同じ使用制限を受けると主張した。しかし、この主張には議論の余地があった。装定用法の「多い」には量化対象と比較対象が必要となり、量化対象と比較対象の指示レベルがずれることを示したが、これは述定用法の「多い」では必要条件ではない。さらに、ガ格とハ格の違いによって、「多い」の容認性が変化するなど、構文の違いを考慮する必要がある。これについては今後の課題としたい。

注

* 本稿の草稿に目を通してくださった加賀信広先生（筑波大学）に感謝申し上げる。有益かつ示唆的なコメントは、議論の修正や分析の手がかりに大いに役立った。英文要旨の校正にご協力いただいた同僚の Michael Herke 氏と Todd Hooper 氏にお礼申し上げます。また、2名の覆面査読者にも感謝したい。おかげで説明不足の箇所や誤植などを修正できた。もちろん、残った不備はすべて筆者の責任によるものである。なお、本研究は科学研究費補助金基盤研究(C)「部分・全体関係を表す表現の日英対照研究」（課題番号：15K02618）による研究の成果の一部を含んでいる。

1 名詞の「多く」は次のように量化対象の名詞（句）と交替することができる。

- | | | |
|------|-------|----------------------|
| (i) | 多くの学生 | most students |
| (ii) | 学生の多く | most of the students |

(i)では「多く」が名詞を前から量化しているが、(ii)では後ろから量化している。「多く」と「たくさん」の解釈の違いについては、加賀(1997)で詳しく論じられている。また、名詞の種類によって(i)と(ii)の形式の解釈の違いが生じることがある。詳しくは、田中(2015)を参照のこと。

2 服部(2002)は「多い」だけでなく、「少ない」にも絶対的解釈と相対的解釈を認めている。本稿では「少ない」を考察対象にしないが、「多く」と「少ない」には違いもあることが知られている。

- | | | |
|------|---------------|----------------|
| (i) | *少なくの学生 | cf. 多くの学生 |
| (ii) | 少ない給料でやりくりする。 | (中川(1975: 32)) |

(i)は「多い」が〈名詞形+の〉の連体修飾表現をもつものに対して、「少ない」はそれをもたないことを示している。また、(ii)が容認されることから、「少ない」が単独で連体修飾できることがわかる。

3 次のように数量表現が連体修飾節の外に生じると解釈が変わる。

- (i) 国道ですれ違った2台の乗用車がパンクした。 (田中(2015: 100))

「2台の乗用車」はトークン解釈を受けるため、「パンクした」と整合するようになる。

4 『明鏡国語辞典』によると、「方」の語義は以下のとおりである。

- (i) いくつかある区分のうちの1つ。特に対立するもののうちの1つ。

筆者の言語直感では、「3つの中で」のように集合のメンバーの数が3以上の明確な数の場合は、「方」ではなく「もの」とした方がすわりがよい（「3つの中で多いものを選んでください」のように）。集合のメンバーの数が2の場合、あるいは漠然としている場合は、「演説は得意だが、書く方は苦手だ」や「家事の方にまで手が回らない」（いずれも『明鏡国語辞典』より）のように自然となる。

- 5 理論的には「多い」を句ではなく節(CP)と捉えて [NP [CP 多い] 映画館] と分析する可能性がある(加賀信広教授との個人談話)が、「多い」が節であるどうかはここでの議論の妥当性に関わらないのでこの問題には立ち入らない。
- 6 名画座とは旧作映画を上映する映画館の種類の名称である。映画館のほかの種類として、新作映画を全国規模で上映する封切館(ロードショー館)や独立系の新作映画を上映するミニシアターがある。「映画館の種類」(<http://cinagon.jp/>)を参照。
- 7 今井(2012: 78 注 6)は、次の例文に対して本研究のようなタイプ・トークンの区別に基づいた説明を試みている。

(i) この近所には九州に多いコンビニがある。(今井(2012: 78))

今井は、「この近所に・九州に」という2つの場所句の働きについて、存在動詞との関わりで論じている。それによると、「上の文は、全く同一のコンビニ店舗が九州にもこの近所にもあるということの意味しているのではなく、九州に多いタイプのコンビニのトークンがこの近所に存在しているということの意味している」と説明している。今井は(i)のような例における名詞句の指示対象の記述については、別稿に譲るとしている。今井は存在動詞の「ある」との兼ね合いで「コンビニのトークンが存在する」と捉えているが、我々の分析では「多い」がコンビニの軒数(トークン)を量化しており、被修飾名詞の「コンビニ」は種類(タイプ)を表していると捉える。(i)の解釈は、複数の種類があるコンビニのうち、九州に軒数が多いものがこの近所にある、となる。

8 総称文はクジラの属性を表す。例えば、(56)はクジラの多くが温暖な海や餌の多い沖合にいることを表すが、温暖でない海・餌が少ない沖合にいるクジラがいることを否定しない。つまり、すべてのクジラの個体について述べているのではない。

参考文献

- 今井 忍 (2012) 「なぜ「多い学生」「少ない本」と言えないのか — 〈存在〉という意味成分に基づく再検討」『日本語・日本文化』第 38 巻, 53-80, 大阪大学日本語日本文化センター.
- 加賀信広 (1997) 「数量詞と部分否定」廣瀬幸生・加賀信広『指示と照応と否定』91-178, 東京: 大修館書店.
- 木下りか (2004) 「形容詞の装定用法をめぐる一考察 — 「多い」「遠い」の場合 —」『大手前大学人文科学部論集』第 5 号, 25-35.
- 久島 茂 (2010) 「形容詞の意味 — 「多い」を中心として —」澤田治美 (編) 『語・文と文法カテゴリーの意味』173-190, 東京: ひつじ書房.
- 佐野由紀子 (2016) 「「多い」の使用条件について」『日本語文法』第 16 巻第 2 号, 77-93, 東京: くろしお出版.
- 田中秀毅 (2015) 『英語と日本語における数量表現と関係節の解釈に関する記述的・理論的研究』東京: 開拓社.
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』東京: くろしお出版.
- 中川正之 (1975) 「多・遠と的一日本語との比較から」『アジア・アフリカ語の計数研究』第 1 号, 31-45, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 中川正之 (2009) 「中国語から見た日本語の文法記述 — とくに「多い・少ない, 遠い・近い」をめぐる —」『月刊言語』第 38 巻第 1 号, 56-63, 大修館書店.
- 仁田義雄 (1980) 「「多イ」「少ナイ」の装定用法」『語彙論的統語論』233-250, 東京: 明治書院.
- 服部 匡 (2002) 「多寡を表す述語の特性について」玉村文郎 (編) 『日本語学と言語学』61-74, 東京: 明治書院.
- Bolinger, Dwight (1967) "Adjectives in English: Attribution and Predication." *Lingua* 18, 1-34.
- Carlson, Gregory N. (1977) "Reference to Kinds in English," Doctoral dissertation, University of Massachusetts.
- Kaga, Nobuhiro (1991) "Humanness and the Kind-level Interpretation." *Tsukuba English Studies* 10, 51-67.

辞典

『明鏡国語辞典』北原保雄 (編), 大修館書店, 東京, 2002 年.

Summary

It has been claimed, since the mid-seventies, that the attributive use of the Japanese adjective *ooi* is more restricted than the predicative one. For instance, *ooi* by itself cannot modify nouns (e.g., **ooi kujira* (many whales)), which contrasts with the behavior of ordinary adjectives (e.g., *ookii kujira* (large whales)). On the other hand, *ooi* by itself can be predicated of nouns, as in *kujira ga ooi* (Whales are many (lit.)). What makes things complicated is that there are cases in which *ooi* by itself can modify nouns, as in (*gakusei ga*) *ooi kurasu* (the class that has many students). It seems that the parenthesized element is contextually inferred; however, for some unknown reason, such an inference does not occur in the case of **ooi kujira*. This study attempts to explain when the attributive *ooi* is permitted. The main proposal is that two distinct elements are required: (i) a set of entities that *ooi* quantifies and (ii) one or more additional sets that are compared to the first set. This study also compares the attributive *ooi* to the predicative one. It is argued that the above requirement does not apply to the predicative use, but some different treatments are necessary because the acceptability of the predicative use of *ooi* is affected by the *wa/ga* selection.